

神学校週間によせて

2018年6月24日 [日] ~ 7月1日 [日]

神学校週間・・・1978年日本バプテスト連盟全国壮年会連合 第1回総会にて1979年度より6月第4週の1週間を「神学校週間」とすることが決議されました。

「宣教する弟子たち」の

献身と神学生

西南学院大学神学部

神学部長 金丸 英子



「この礼典を受けるように、キリストによって導かれていく者に対して、聖書は彼らが宣教する弟子となるように要求している。これは特別な教会と役員、あるいは特別な人に要求されているのではなく、キリストの委託は弟子たる者すべてに与えられているものにほかならない」(ロンドン信仰告白、41項)

バプテストの先達は、「この礼典(バプテスト)を受けるように導かれる者は、「宣教する弟子」となるように求められていると告白しました。この部分は、当時の敵対者から手酷く批判されました。福音宣教が「特別な人(教職者)以外の、バプテストを受けた「すべて」(信徒)に委ねられているとしたからです。後にその部分の変更を余儀なくされたものの、先達は、キリストに従う者として導かれ、バプテストを受けた個々の信仰者が教会を立て、その教会の総意によって、特定の人物の召命を認め、伝道者として立ててゆくとの告白は掲げ続けました。

確かに、ひとりの人の献身の決意は、キリストとの間の、極めて人格的で個人的な信仰の出来事に違いありません。しかし、その背後には、キリストの委託を受けた「宣教する弟子」としての交わり・教会が必ず存在します。「宣教する弟子たち」によるバプテスト教会の真骨頂です。教会の祈りのないところでの献身の歩みほど、孤独で、険しいものではありません。神学生たちは、神からの召命を受け、生活を献げて、人間的な諸課題に悩み、神学の学びと格闘しながらも、日々伝道者としての備えをしています。教える者は、学生にその召命をお与えになった神と、送り出して下さった教会に信頼を置いて、務めに励んでいます。

キリストから「宣教する弟子たち」と呼ばれた教会の兄弟姉妹の皆様、同労の仲間として神学生を覚え、祈りの内に歩みを共にしていただきますよう、神学校週間のこの時、改めてお願い申し上げます。

◎神学生の証し◎

大きく変えられた学び



九州バプテスト神学校
牧師コース2年
田口 清吾
(岐阜バプテスト教会推薦)

日ごろから、神学生の学びを支えお祈りくださっている兄弟姉妹に感謝いたします。

九州バプテスト神学校で学び始めて6年目の春を迎えました。聖書の学びを深めるために入学した神学校ですが、学びを通じてわたし自身の生き方が大きく変えられました。学びに関しては、自分の理解力不足に悩まされ続けていたのですが、イエス・キリストがその生涯を通じて一貫して負しい人、病気の人も社会的弱者とともに生き抜かれた、という事実に触れるなかで、これまでの人生観が打ち砕かれ新たにさせられました。それは、残された人生を社会から小さくされた人や障がいのある人とともに生きよよという啓示を、イエスさまからいただいたかのようなものでした。この言葉にうながされて、今春から生活困窮の方々との相談・就労支援員としての歩みを始めました。

また、牧師コースのカリキュラムである教会研修では、平針キリスト教会で学ばせていただきました。2年数ヶ月の無牧期間を経て谷総安雄牧師が赴任されたばかりでしたが、牧師をはじめ教会の兄弟姉妹に許されて、教会のミッシヨンステートメントに基づいた新たな教会形成を、共に体験する貴重な機会を与えられました。

今年度は、卒業研究のテーマとして「生きる価値」について取り組んでいます。津久井やまゆり園事件で犯人が語った「生きる価値のないのち」といわれた人々、在日・滞日外国人や路上生活者などに向けられるような、いわれない差別・偏見を受けている人々、イエス・キリストはどのようなようにしてこれらの人々の友となったのか、そこから我々は何を学びどう行動すべきなのかについて考察します。

このように学びの機会を与えられましたことに感謝します。



◎「新約聖書概論」授業

今日も1日よく頑張った!

栄光は主に



東京バプテスト神学校
教会音楽科専攻科3年目
澤田 ルツ子
(千葉バプテスト教会推薦)

1日の仕事を終え、家事と育児を(仕事を早退して帰宅する)夫と交代し、茗荷谷の神学校へと急ぎ向かう。時には疲労感で心がすぐに学びへと向かないことも。この生活が6年目を迎えています。仕事は病院の精神科作業療法音楽療法プログラムと助手業務。私にとって医療福祉の現場は、み言葉の実践の場として喜びがたくさんある、とても充実する職場です。子どもは、神学校に入学当時は3人でしたが、いまは小学5・3・1年生と2歳の4人。専攻科の2年目は、妊娠と出産で勉強はあまり進みませんでした。その時お腹にいた子は、多くの方々の祈りと励ましを受け、産後は合唱の授業へ抱っこで一緒に出席し、今もたくさんの愛を受けています。どんなに大変でも、熱心な先生や学びの友、また送り出してくださいている教会の祈りと、応援してくれる家族に支えられ、「主の宮に招かれ、疲れが癒され、聖霊に満たされる」そんな神学校の学びに、私の霊は燃やされ続けています。私が頑張っても到底乗り越えられない困難な状況の中で、確かに主が働いておられるのです。ともするとすぐに自分の頑張りを満足げに誇らしく思ってしまう誘惑にかられます。しかし、すべての栄光を主に返し、「主が与えてくださっている賜物を、主の御用のために清めて用いてください。私という土の器を通して、主が栄光を示されますように」と祈りつつ、主にある兄弟姉妹と共に神さまを賛美していきたくしたいと思います。



◎写真上・合唱の授業風景
下・2017年度 教会音楽科演奏会

書き送られる手紙として生きる



西南学院大学大学院
博士前期課程2年
元川 信治
(調布バプテスト教会推薦)

西南学院神学部在籍している間に、学生たち1人ひとりが取り組んでいること。それは、吟味という言葉によって言い表すことができるように思います。吟味には、「吟じて趣きを味わう、物事を詳しく調べる、調べたです」といった意味があります。私たちは、原典から読み解こうとすること、さまざまな聖書記を比較研究することを通して、聖書が語るメッセージに浸り、その豊かさを味わいます。また、学ぶにあたっては、それまで持っていた聖書理解、教会のイメージといったものから一度自由にならされて、念入りに調べた上で選り直すことが求められます。その過程では、聖書解釈の妥当性の評価、キリスト教会の歩みの振り返りに加えて、自らを批判の内に置くことも必要とされます。

神学部で経験していること。それは、語られた者として語ろうとし、聞かれる者としてまず聞こうとし、愛の内に生かされ、育まれている者として、愛を行う者へと変えられていくということに尽きると思います。伝道者とは、手紙のような存在です。神学部での学びに加えて、推薦教会からの派遣、研修教会での奉仕、神学寮での共同生活、国内・海外での交流プログラムへの参加といった機会を通して、その「紙面」には、ことばが刻まれていきます。そのような主のみ手にある一通の手紙として、キリストの福音を宣教する者として、生きていきたいと願います。



◎「ヘブライ語1」の授業風景